

第一次世界大戦中の戦争目的とアンシュルス

栗原 久定

はじめに

本稿は、第一次世界大戦中のドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー二重君主国の戦争目的における諸要求を示し、それが大戦後も国家規模での要求として保持される事を指摘し、近代ヨーロッパにおける地域の再編成と社会秩序を論じるものである。

大戦中には、同盟国においては、戦争目的 *Kriegsziel* に関する書物が多数、出版されており¹、その中でも、中欧 *Mitteleuropa*²、中央アフリカ *Mittelafrika*³を軸として地域再編に関する要求が協商国に向けて出された。またその要求の前提条件として、ドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリー二重君主国のドイツ人が経済的・政治的に結束する必要性が述べられていた。同盟国にとって、膠着した塹壕戦への打開策として、総力戦体制の構築が不可欠であり、占領地域の統治にも人員を回さねばならなかったが、そのために確固としたドイツ人同胞の協力が必要だったのである。一方で大戦が進むにつれ、軍事的に弱体化し、国内の統治も不安定的になった二重君主国に対して、ドイツ政府は見切りをつけ、ドイツと隣接する地域の併合が目指された⁴。二重君主国の側からは、ドイツ帝国の影響力の増大は自覚しつつも、中欧、のちの世界帝国の中で自らが最重要の経済的なパートナーとなることを望んでいた。大戦終結間際に、ドイツ、オーストリア政府は、最低限の要求の中で、ドイツ人の自決権に基づき、アンシュルスを行う必然性を強調した。アンシュルスに至る思想、政治活動⁵は、すでに分析されているが、今回は第一次世界大戦中の植民地構想と独逸合併と政治的關係をとりあげる。本稿は、ヒトラーによる 1938 年のドイツ、オーストリアのアンシュルスに至る道が、大戦中の植民地構想から派生している点を明らかにするものである⁶。

¹ オーストリアのドイツ系住民の戦争目的に関しては、Carl Brockhausen, *Oesterreichs Kriegsziel* (Wien, 1915)。ドイツの戦争目的に関しては、Houston Stewart Chamberlain, *Deutschlands Kriegsziel* (Oldenburg, 1916)。Erich Brandenburg, *Deutschlands Kriegsziele* (Leipzig, 1917)。全ドイツ連盟の戦争目的に関しては、Heinrich Claß, *Zum deutschen Kriegsziel. Ein Flugschrift* (München, 1917)。ロシア革命に対するドイツが要求した戦争目的に関しては、Paul Rohrbach, *Unser Kriegsziel im Osten und die russische Revolution* (Weimar, 1917)。

² Friedrich Naumann, *Mitteleuropa* (Berlin, 1915)。

³ Sönke Neitzel, „Mittelafrika“ Zum Stellenwert eines Schlagwortes in der deutschen Weltpolitik des Hochimperialismus, Wolfgang Elz, Sönke Neitzel (Hg.), *Internationale Beziehungen im 19. und 20. Jahrhundert. Festschrift für Winfried Baumgart zum 65. Geburtstag* (Paderborn, 2003), 83-103。またアフリカのポルトガル植民地をめぐる大戦前の英独間の外交交渉に関しては、以下を参照。Rolf Peter Tschapek, *Bausteine eines zukünftigen deutschen Mittelafrika. Deutscher Imperialismus und die portugiesischen Kolonien. Deutsches Interesse an den südafrikanischen Kolonien Portugals vom ausgehenden 19. Jahrhundert bis zum ersten Weltkrieg* (Stuttgart, 2000)。Beatrix Wedi-Pascha, *Die deutsche Mittelafrika-Politik, 1871-1914* (Pfaffenweiler, 1992)。

⁴ ドイツ側の軽視に対して、オーストリア側は中欧という共通の空間の中でドイツと対等な地位が保てると考えていた。Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland, 1914-18* (Düsseldorf, 1961) [村瀬興雄監訳『世界強国への道 I ドイツの挑戦、1914-1918 年』岩波書店、1972 年、同監訳『世界強国への道 II ドイツの挑戦、1914-1918 年』岩波書店、1983 年。]

⁵ Norbert Schausberger, *Der Griff nach Österreich. Der Anschluss* (Wien/München, 1978)。

⁶ Woodruff D. Smith, *The Ideological Origins of Nazi Imperialism* (New York/Oxford, 1986)。

先行研究

1. ヘンリー・コード・マイヤー (Henry Cord Meyer)

第一次世界大戦中の戦争目的に関しては、まずヘンリー・コード・マイヤーの『ドイツの思想と活動における中欧 1815-1945』を見る必要がある。マイヤーは、第一次世界大戦中の戦争目的としての立案されたフリードリヒ・ナウマン⁷の中欧構想が、大戦後もアンシュルスという要求として戦間期を通して存続することを指摘している。その構想の立案は、ドイツ統一をめぐる交渉を踏まえて行われ、大戦前の独逸関税同盟が下地となっており、ドイツ人の生存を保障する領域という地政学な根拠も加えられていた⁸。ドイツ人を支えていく経済的基盤として中欧が存在し、それは世界強国となるために必要不可欠なものとして外務省、植民地省などによって強調されていったのである。大戦前に醸成されていた中欧構想が、大戦中、戦争目的議論の際に普及していき、持久戦を耐え抜くためのドイツ人の結束という発想も広がった。その結果、大戦後、中欧の要となるアンシュルスがドイツ人の目標として確立したのであった。

2. フリッツ・フィッシャー (Fritz Fischer)

同盟国の政府指導部の具体的な政策に関しては、フリッツ・フィッシャーの『世界強国の道』を参照する必要がある。彼は外務省史料から、ドイツの政府指導部の戦争目的を明らかにし、大戦を通して、中欧構想が継続して、植民地構想とともに戦争目的とされ、ドイツ人による世界支配が目指された点を指摘した。戦争目的の両輪は、中欧構想と中央アフリカ構想であり、これらはドイツ人が世界強国に躍進するために必要なものであった⁹。その目的達成のためにはドイツ人、またはドイツ人に協力する勢力との間の結束が不可欠であった。ドイツ政府にとって、東欧のドイツ系住民、また北米、南米、アフリカ、中東に移住していたドイツ系住民との連帯を進めるのは当然であったが、何より中欧の核となるオーストリア＝ハンガリーにおけるドイツ系住民を取り込むのは最優先の課題であった。ドイツ帝国にとって、独逸合邦は、世界強国の前提条件となったのであった。ただしオーストリア＝ハンガリーが同盟国の内部で経済的・軍事的役割を果たすのが困難になるにつ

⁷ ドイツ帝国の自由主義者。彼の著作『中欧』により、中欧構想は同盟国内部のみならず、協商国でも議論されることになった。

⁸ Alfred Hettner, Rudolf Kjellén, Karl Haushofer などが立案していた。

⁹ ヨーロッパにおける経済的・政治的優位、航海の自由、植民地の原料獲得、中東への安定的な交通路を保障するものとされた。ドイツ植民地相ヴィルヘルム・ゾルフなどが主張。Freiherr von Mackay, "Deutsch-Mittelafrika?", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 131-133.

れ、ドイツ政府は、オーストリア地域を従属する地域と考えるようになった。大戦末期、同盟国の政府間で、アメリカ大統領ウィルソンの 14 か条を受け入れて、休戦に持ち込む協議がなされても、アンシュルスはドイツ民族にとって当然の権利とされ、継続して要求されたのである。

3. 近年の研究課題

上記の二つの研究を踏まえて、二重君主国で提唱された中欧を含めて、第二次世界大戦後に至るまでの全ドイツ主義、その実現に向けた政策に関して論じているのが、『二十世紀の前半における中欧概念』である¹⁰。中欧の前提条件（独逸関税同盟の構築、世界分割後の植民地再分配交渉の失敗、ナショナリズムと密接に結び付いた地政学・人種学などの普及）は、大戦直前に独逸の外務省、植民地省と民間の政治団体¹¹によって用意された¹²。それらの条件を踏まえて、大戦中に生じた状況（海上封鎖に伴う食料・原料・人員の不足、協商国によるドイツ植民地の占領、西部戦線と東部戦線における膠着状態、ドイツ・ナショナリズムの高揚）が重なり、総力戦を耐えうる中欧の実現が目指された。これらは、ドイツ帝国内部だけではなく、オーストリア＝ハンガリーにおけるドイツ系住民、マジャール人、チェコ人などの間で議論されていった¹³。また民間の政治活動は、大戦を経るに従い、政府に対する圧力を強め、最終的には、戦争目的の要求を動かすまでに至った¹⁴。ドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー二重君主国という枠を超えた国家構想として中欧が考えられ、その中で統治の分担が叫ばれる中で、アンシュルスはドイツ人の政治的な基盤として確定した¹⁵。大戦が進むにつれ、独逸双方の対等な同盟を基礎とする中欧の実現が難しくなった後も、オーストリアではアンシュルスの実現が目指された。大戦後もドナウ連邦などの代替案ではなく、協商国から禁止されたアンシュルスが最もオーストリアで受け入れられ、最終的にナチスドイツの生存圏構想につながることを示す¹⁶。

ドイツ、オーストリアの戦争指導部の地域再編計画に関しては、上記のフリッツ・フィッシャーの『世界強国の道』に加え、彼の弟子のイマニュエル・ガイスなどが、東欧にお

¹⁰ Wolfgang Mommsen, “Die Mitteleuropaidee und die Mitteleuropaplanungen im Deutschen Reich vor und während des Ersten Weltkrieges”, in: Richard G. Plaschka/Horst Haselsteiner/ Arnold Suppan/Anna M Drabek/Birgitta Zaar (Hg.), *Mitteleuropa-Konzeptionen in der Ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts* (Wien, 1995), 3-24.

¹¹ 中央経済協会など。藤瀬浩司「ユリウス・ヴォルフと中欧経済協会 1904-1918」『経済科学』44 巻 3 号 (1996), 1-20.

¹² Winfried Baumgart, *Deutschland im Zeitalter des Imperialismus (1890-1914). Grundkräfte Thesen und Strukturen* (Frankfurt am Main, 1972). 世界強国に向けてのドイツ外務省の対英交渉に関しては、以下を参照。Friedrich Kießling, *Gegen den "großen Krieg"? Entspannung in den Internationalen Beziehungen 1911-1914* (München, 2002).

¹³ Sönke Neitzel, *Weltmacht oder Untergang* (Paderborn, 2000).

¹⁴ Hildebrandt, Philipp, “Propaganda und Kriegsziele”, in: *Deutsche Rundschau*, 176(1918), 136-149.

¹⁵ 中東に向かう際の中継地点としての二重君主国とバルカンの地位については、杉原達『オリエントへの道：ドイツ帝国主義の社会史』（藤原書店、1990）を参照。

¹⁶ Klaus Hildebrand, *Vom Reich zum Weltreich. Hitler, NSDAP und koloniale Frage 1919-1945* (München, 1969).

ける強制労働¹⁷、ドイツ住民の移住¹⁸、食料調達¹⁹、人的物的資源の運搬²⁰などの占領政策分析などが進められている。またベートマン＝ホルヴェークの側近であったベルンライター²¹の文書を用いた政府指導部の戦争政策分析もあり、同盟国の各政府における戦後構想の内容は分析可能である。

しかしながら、政策実行者の周囲にいた人々の政治活動に関しては、全ドイツ連盟などの政治集団ごとの研究はあるが²²、その他の個別の構想の相違点、共通点、その構想作成の歴史的背景、大戦の経過に伴う要求内容の変化²³、その構想の普及の課程などを示した研究は少ない²⁴。この一端を調べるために、今回は、ロビー活動を行っていた、政府中枢との関係が深い人々²⁵の戦争目的を取り上げる。これらの地域再編構想は、政府の構想と連動しつつ、練られていており、幅広い層から戦争協力を引き出すために、労働者、農民の支持を取り込める戦争目的を設定していった²⁶。城内平和に協力した社会主義者も政党内の民族問題、労使関係の解決を踏まえた中欧構想、植民地構想を提案していき、同盟国の政府指導部との連絡も密にとっていた²⁷。また同盟国におけるマジャール人などもドイツ人の戦後構想議論に参加し、世界支配においてハンガリーが担う役割を唱えた²⁸。彼らは政策パンフレットなどによる宣伝、キャンペーンを行ったが²⁹、その社会全体への影響に関しては十分に示されていない。民間の政治活動が中欧構想を広め、その普及が大戦後

¹⁷ ポーランドの季節労働者は、ドイツ東部の農業経営に従事し、重要な労働力だった。同盟国政府は、大戦中、その代わりとなる労働力を強制的に確保しようとした。Immanuel Geiss, *Der polnische Grenzstreifen 1914-1918. Ein Beitrag zur deutschen Kriegszielpolitik im Ersten Weltkrieg* (Lübeck/Hamburg, 1960).

¹⁸ プロイセンの官僚シュヴェーリン、ドイツの経済学者ゼーリングらが計画。Max Sering, *Westrussland in seiner Bedeutung für die Entwicklung Mitteleuropas* (Leipzig, 1917). 中央アフリカ構想提唱者のパウル・ロイトヴァインも南西アフリカ植民地経営のノウハウを東欧に持ち込んだ。Paul Leutwein, *Mitteleuropa-Mittelafrika* (Dresden, 1917).

¹⁹ ウクライナ、ルーマニア、オーストリア＝ハンガリーの穀倉地帯への期待が高まった。Eugen Lewicky, *Die Ukraine der Lebensnerv Rußlands* (Stuttgart/Berlin, 1915).

²⁰ 鉄道網建設により占領地を中央ヨーロッパの交通網に連結する計画が練られた。

²¹ Alfred Kruck, *Geschichte des Alldeutschen Verbandes, 1890-1939* (Wiesbaden, 1954).

²² 最終的には全ドイツ的要求に帰結していく。

²³ シュテッカーは、中欧と植民地構想が連動しつつ、戦後にドイツとオーストリアが求めるアンシュルスの下地となったことを分析している。Helmuth Stoecker (Hg.), *Drang nach Afrika. Die koloniale Expansionspolitik und Herrschaft des deutschen Imperialismus in Afrika von den Anfängen bis zum Ende des zweiten Weltkrieges* (Berlin, 1977).

²⁴ 経済学者、歴史学者、地理学者、官僚、実業家、ジャーナリスト、全ドイツ連盟、植民地協会、艦隊協会など。

²⁵ 労働者に対しては戦争協力を求めたのは、ドイツの社会民主党多数派、そしてカール・カウツキー、グスタフ・ノスケなどで、オーストリア社会民主党ではカール・レンナーが代表者であった。農民に対する戦争協力の呼びかけに関してはハンス・デルブリュック、マックス・ゼーリングが中心となって活動した。政策パンフレットでは『ドイツの戦争 (Der Deutsche Krieg. Politische Flugschriften)』も利用された。Gustav Noske, “Die deutsche Sozialdemokratie und die Kolonialpolitik”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 100-102.

²⁶ オーストリア社会民主党、ドイツ社会民主党多数派は、労使関係の国家管理を歓迎し、民族問題の解決も狙った。レンナー、ノスケ、エーバルトなどが提唱した。Gustav Noske, “Kolonialpolitik nach dem Kriege”, in: *Die Neue Zeit*, 36(1918), 481-488.

²⁷ Eduard Pályi, *Deutschland und Ungarn* (Leipzig, 1915). また中欧とマジャール人との経済的な関係に関しては、以下を参照。Eduard Pályi, *Das mitteleuropäische Weltreichbündnis. Gesehen von einem Nicht-Deutschen* (München, 1916).

²⁸ 『ドイツの戦争 (Der Deutsche Krieg. Politische Flugschriften)』『戦争の平和の間 (Zwischen Krieg und Frieden)』など。中東政策を専門とするパウル・ロールバハは、『ドイツの戦争』において、今回の戦争におけるドイツの戦争目的が経済的、政治的な必要性に基づくことを示した。Paul Rohrbach, *Warum es der Deutsche Krieg ist!* (Stuttgart/Berlin, 1914).

のアンシュルス支持を醸成する以上、その研究を進めることが必要である。

第1章 戦争目的における3つの政治的立場

当時、この戦争目的作成に携わる知識人は、殆どが半官半民であり、政府の大臣、官僚として政策を立案、指導している者が多かった。その中でもカール・ヘルフェリヒ²⁹、ヴァルター・ラーテナウ³⁰、フリードリヒ・ナウマン、ハンス・デルブリュック³¹、エドガー・ヤッフエ³²、パウル・ロールバハ³³、エルンスト・イエック³⁴、オスカー・カールステッド³⁵等に注目する。特に前者3人は、ドイツ政府指導部の戦争目的作成、総力戦体制の構築に携わっており、ドイツ銀行などの資金を動かす地位にあり、彼らの構想の分析を取り扱うことで、その中欧構想の社会的影響力を分析できる。彼らのドイツ帝国と二重君主国との関税同盟、軍事同盟に対する評価は異なり、それが最終的に戦争目的、ひいてはアンシュルスの内容に影響を与えた。また彼らの動向は、敵である協商国側からも監視されており、イギリスの戦争目的議論を左右した³⁶。

彼らの主張していた中欧は、当時の同盟国の知識人が等しく主張していたが、要求内容、その論拠には相違があり、分類を行う必要がある。特に以下の三つは、戦争目的議論に携わる者が、常に念頭に置いていた立場である。

1. ドイツとオーストリアのアンシュルス

大戦前からドイツ、オーストリアの民族主義者が主張しており³⁷、いわゆるドイツ系の人々だけでの合併を望む立場である。スラブ系住民（チェコ人、ポーランド人など）、マジャール人、ユダヤ人などは排除され、それは同盟国内にすでにいる住民でも例外ではなかった。ドイツ人の存続を保障する勢力圏、植民地を必要とし³⁸、それは中欧構想の要求と

²⁹ ドイツの政治家・経済学者。ドイツ銀行をはじめとする金融界と政界をつなぐ人物として、中欧政策を推進した。

³⁰ ドイツの実業家・政治家。大戦中、統制経済の整備を進めた。

³¹ ドイツの歴史家。『プロイセン年報 (Preußische Jahrbücher)』の編集を行い、中央アフリカ構想などの戦争目的作成を行う。

³² ドイツの経済学者。大戦中、『ヨーロッパ国家・経済新聞 (Europäische Staats- und Wirtschafts-Zeitung)』を刊行し、その編集を行った。

³³ 大戦前からオスマン帝国との経済的・軍事的連携を軸にした中東政策を中心にして、ドイツにとっての世界強国への道を宣伝していた。Paul Rohrbach, *Der deutsche Gedanke in der Welt* (Königstein im Taunus, 1912). 大戦前のドイツの帝国主義政策に関しては、以下を参照。Gregor Schöllgen, *Imperialismus und Gleichgewicht. Deutschland, England und die Orientalische Frage 1871-1914* (München, 1984).

³⁴ ドイツのジャーナリスト。ロールバハと『ドイツの政策 (Deutsche Politik)』などを編集。

³⁵ ドイツの植民地省の官僚、ジャーナリスト。『ドイツ植民地新聞 (Deutsche kolonialzeitung)』を編集。

³⁶ 『新欧州 (The New Europe)』などでの戦争目的議論を参照。

³⁷ Georg von Schönerer など。

³⁸ Kurt Wiedenfeld, *Der Sinn Deutschen Kolonialbesitzes* (Bonn, 1915).

も重なっていった。主にドイツの戦争目的の中で主張され、その中でオーストリアは、ポーランド、バルカンのスラブ人の統治を担うことになっていた。またズデーテン地方などの隣接しているドイツ人地域なども含めて、オーストリア経済はドイツ経済の影響下にあり、アンシュルス支持者も多いことから³⁹、オーストリアを経済的に従属させた形で、アンシュルスは実質的に実現するとされていた。しかしロシア革命、ウィルソンの十四か条において自決権への注目が集まると、単純な併合政策ではなく、編入 *Angliederung* が図られるようになった。それを踏まえて、ドイツの各民族主義者は、1918年の夏以降、戦局が悪化した際に、ドイツ民族の自決権に基づき、アンシュルスを要求した。合邦は、大戦の末期、そして大戦後にドイツ、オーストリアの各政府から支持され、外相間の協議も進んだ⁴⁰。課題としては、アンシュルスは、ドイツ人の生存のための基盤であると同時に、ヨーロッパひいては世界の支配民族となる基盤であるため、その人口を維持し、ひいては在外ドイツ人の連帯を作ることがあった。最終的には、独逸を中心とするドイツ人勢力が、残りの圧倒的多数の被支配民族の統治することが予定されていたのである。

2. ドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリー二重君主国の関税同盟を中心とした中欧

同盟国の自由主義者、社会主義者の要求として、最も多い主張であり⁴¹、ドイツ帝国宰相ベートマン＝ホルヴェーク、カール・ヘルフェリヒ⁴²などのドイツ政府指導部を始め、フリードリヒ・ナウマン、ヴァルター・ラーテナウ、エルンスト・イエック⁴³、カール・レンナー⁴⁴などの独逸の政財界に影響力のある人物が提案している。鉄鋼業界⁴⁵、軍部⁴⁶、民族主義者などの協力もあり、最大限の戦争目的の核となっており、中央同盟国（四国同盟⁴⁷）の内部の経済的・政治的結束を高め、周囲の地域の統合を目指したものである⁴⁸。大戦前からヨーロッパ、植民地の再編を主張していた『プロイセン年報（Preußische

³⁹ Hermann Ullmann などの民族的な保守主義者が多かった。

⁴⁰ オーストリア外相オットー・パウアーらが中心となって交渉を進めた。Julius Braunthal, *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk* (Wien, 1961).

⁴¹ Sigmund Kaff, “Zur Frage eines deutsch-österreichisch-ungarischen Zollverbandes”, in: *Die Neue Zeit*, 33(1915), 657-662.

⁴² Karl Helfferich, *Kriegsfinanzen* (Stuttgart/Berlin, 1915).

⁴³ 自由主義者イエック、ナウマンらは、中欧の実現により、経済的・軍事的・政治的な戦争目的は達成されるとした。ナウマンが編集する『救済（Hilfe）』などで主張。

⁴⁴ Karl Renner, *Marxismus, Krieg und Internationale. Kritische Studien über offene Probleme des wissenschaftlichen und des praktischen Sozialismus in und nach dem Weltkrieg* (Stuttgart, 1917).

⁴⁵ August Thyssen, Hugo Stinnes, Emil Kirdorf などは、新興の工業家であるルール男爵 Ruhr Baron として、経済圏構想の討議を重ねた。

⁴⁶ ドイツの軍部において指導的な立場にあったエーリヒ・ルーデンドルフや植民地総督の協力があつた。

⁴⁷ Dr. Freiherrn von Mackay, *Der Vierbund und das neue europäisch-orientalische Weltbild* (Stuttgart/Berlin, 1916). ドイツからオーストリア＝ハンガリー、ブルガリアを経てオスマン帝国へ向かい、そこからインド洋、アフリカへ進出する計画が練られた。

⁴⁸ アントワープ＝ハンブルク＝ヴィーン＝ソフィア＝コンスタンティノーブル＝バグダードまでつながる中欧が目指された。フィンランドも含めると、ノルトカッパからペルシア湾に達する規模であった。中欧内部では関税同盟の整備、資源の管理を進める予定であった。K. von Winterstetten, *Berlin-Bagdad. Neue Ziele mitteleuropäischer Politik* (München, 1914).

Jahrbücher)』、また大戦中に刊行された『ドイツの政策 (Deutsche Politik)』、『ヨーロッパ国家・経済新聞 (Europäische Staats- und Wirtschafts-Zeitung)』では、中央同盟国を基盤とした中欧を要求する記事が掲載された。特にオーストリア＝ハンガリーは、ドイツ側からロシア、バルカン、中東を経済的に管理する上で重視されていた⁴⁹。膠着状態にある西部戦線⁵⁰と東部戦線を暫定的な国境としつつ、戦勝に伴い、独逸にとって必要な地域の併合を行う予定であった。中欧内部では、各国の政治体制は保持されるが、経済的な主導権に関しては、ドイツが握ることになっていた⁵¹。中欧を支える原料供給地として植民地獲得も想定されており、ドイツの将来の安全のためにアフリカ、南アメリカ、アジアにおける勢力圏も連動して考えられていた。ただし植民地に向けての航路がイギリスに占領されている間は、海外の植民地構想⁵²に関しては、戦後にしか実現しないために、目下、占領していた東欧、中東への中欧の拡大を目指した⁵³。常に中欧の領域に対して再定義が行われ⁵⁴、ドイツ帝国主義の道具、目的となった。課題としては、中欧という大経済圏の内部で調達できない原料の獲得⁵⁵、そして統治に必要な人員の調達、統治手法などであった。

3. 中欧を軸にした世界帝国

1. と 2. の戦争目的が行きつく最終的な目的として、イギリス、アメリカ、ロシア、フランスという世界強国 *Weltmacht* と並ぶことが設定されていた。フライヘーア・フォン・マッカイ⁵⁶、オットー・イエリンガー⁵⁷、カール・ペータース、ハインリヒ・クラス⁵⁸、ヴィルヘルム・ゾルフ⁵⁹、アルトゥール・ディクス⁶⁰、オスカー・カールステッド⁶¹、パウ

⁴⁹ Richard Charnatz, *Österreich-Ungarns Erwachen* (Stuttgart/Berlin, 1915).

⁵⁰ ベルギーは常に西部戦線として植民地における戦争目的の対象であった。ドイツのベートマン＝ホルヴェーク政府からヘルトリック政府に至るまで、ベルギーは戦争目的を達成する際の抵当であり続けたのである。Al. Meister, *Unser belgisches Kriegsziel* (Münster, 1917).

⁵¹ 最終的には中欧を構成する諸国を経済的・政治的に従属させ、戦争を継続させることが目的となった。実際、外交、軍事、財務に関しての主導権をドイツが握るようになった。

⁵² 同盟国の植民地が目下、協商国により占領中という事もあり、その損失を補う戦争目的が練られた。J. Hashagen, "Kolonialverluste und Kriegsziele", in: *Grenzboten*, 76(1916), H.51, 324-327. その際に最重要の担保とされたのはコンゴを所有するベルギーであった。Josef Wiese, *Belgisch-Kongo* (Berlin, 1916).

⁵³ オスマン帝国は、ドイツにとって大戦前の最重要の経済的、政治的な連携相手であったが、大戦中に経済破綻し、ドイツへの従属が進んだ。負債の支払いとして、ヘラクレーア石油利権などに対するドイツの支配が強まった。中東に向けての植民地政策に関しては、以下を参照。Albrecht Wirth, Emil Zimmermann, *Was muß Deutschland an Kolonien haben?* (Frankfurt, 1918).

⁵⁴ Jacques Stern, "Mitteleuropa". *Von Leibniz bis Naumann über List und Frantz, Planck und Lagarde* (Stuttgart, 1917). 『中欧』の代表的な提唱者であるナウマンも占領地域が拡大していくにつれ、要求する中欧の範囲を変えていった。Friedrich Naumann, *Bulgarien und Mitteleuropa* (Berlin, 1916).

⁵⁵ エミール・ツィンマーマンのような中央アフリカ提唱者は、中欧をアウタルキーと見なすには不十分としてナウマンらを批判した。

⁵⁶ ヨーロッパ、アフリカ、アジアにまたがる最大限の戦争目的を提唱したドイツのプロパガンディスト。Freiherr von Mackay, "Der Staat, National- und Weltwirtschaft", in: *Deutsche Rundschau*, 174(1918), 6-30.

⁵⁷ Otto Jöhlinger, "Koloniale Kriegs- und Friedensziele", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 91-92.

⁵⁸ 全ドイツ連盟の代表者。Heinrich Class, *Zum deutschen Kriegsziel. Ein Flugschrift* (München, 1917).

⁵⁹ ドイツ植民地相として、植民地構想の重要性を語っているのは以下の史料。W. H. Solf, *Die Lehren des Weltkriegs für unsere Kolonialpolitik. Ein Vortrag* (Stuttgart, 1916). そして1918年3月27日にもアフリカのゲルマン化について述べ、鉱山連合(ユニオン・ミニエール)の経営に関してもドイツが参入することを要

ル・ロイトヴァイン⁶²などが、『さらに大きなドイツ (Das Größere Deutschland)』、『国境郵便配達夫 (Grenzboten)』、『ヨーロッパ国家・経済新聞』、『世界経済 (Weltwirtschaft)』などにおいて、植民地再編も含めた最大限の要求を主張した⁶³。大戦前から植民地主義的政策を進めてきた全ドイツ連盟、植民地協会も、彼らの新聞、出版物、政策パンフレットなどにおいて、ドイツの世界支配の実現を要求した⁶⁴。当初は各要求の内容、その根拠には相違があったが⁶⁵、大戦後半になると、各主張の違いが無くなり、ドイツ人の世界支配のための条件が協商国に向けて提示されるに至った⁶⁶。彼らの主張は、ナチスドイツの生存圏構想につながるものであり、ドイツ人の存続、発展に必要な資源、防衛のための領域を要求した⁶⁷。そのためには植民地の再分配、そしてその植民地とヨーロッパの連絡路の安全が保障されねばならず、植民地を含めた大勢力圏の構築が目指された⁶⁸。オーストリアにおける最大限要求の提唱者は、この大戦に勝利した後での戦利品をドイツと共有することを期待しており⁶⁹、バルカン半島、オスマン帝国を介して⁷⁰、エジプト⁷¹、インド洋にでる上で、二重君主国が拠点⁷²となることを自認していた⁷³。しかしアフリカ⁷⁴、アジア⁷⁵、アメリカ⁷⁶にわたる植民地を含めた勢力圏を作るためには、航海の自由⁷⁷が必要であり、現在、海上封鎖⁷⁸を行っているイギリスの降伏を目指すことになる。制海権の奪取が絶望的となる中で、ロシア革命以降は、東方への拡大が進み、ヨーロッパ内部における人的物的資源

求した。

⁶⁰ ドイツの地政学者。大戦中は中欧、大戦後は植民地再編、ヴェルサイユ体制の打破を目指した。Arthur Dix, *Der Weltwirtschaftskrieg. Seine Waffen und seine Ziele* (Leipzig, 1914).

⁶¹ Oskar Karstedt, *Koloniale Friedensziele* (Weimar, 1917).

⁶² 彼は、中欧と中央アフリカへの要求を『ヨーロッパ国家・経済新聞 (Europäische Staats- und Wirtschafts-Zeitung)』で発表した。

⁶³ Carl Jentsch, “Wo liegt unser Kolonialland?”, in: *Grenzboten*, 75(1916), H.38, 375-378.

⁶⁴ 祖国党などもその例にもれず、ドイツとアングロアメリカニズムとの対決を叫び、南米、アフリカへの航路を保障する海軍基地の設置を唱えた。Alfred von Tirpitz, *Der Aufbau der deutschen Weltmacht* (Stuttgart, 1924).

⁶⁵ 中央アフリカ構想においても、要求内容に対する見解の違いがあった。Hugo Marquardsen, “Zentralafrika und Mittelfrika”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 5-6.

⁶⁶ Oskar Karstedt, “An der Schwelle einer neudeutschen Kolonialpolitik”, in: *Grenzboten*, 76(1917), H.50, 281-289.

⁶⁷ Oskar Karstedt, *Deutschlands koloniale Not* (Berlin, 1917).

⁶⁸ Mackay の「中欧・地中海・中央アフリカ (Mitteleuropa-Mittelmeer-Mittelfrika)」勢力圏構想など。この植民地を含めた勢力圏に関しては以下参照。Oskar Karstedt, “Grundsätzliches zur Kolonialfrage”, in: *Grenzboten*, 75(1916), H.43, 97-102.

⁶⁹ マジャール人も世界帝国の統治に参加しようとしていた。その参加を目指したのは Eduard Pályi, Czirbusz Géza など。

⁷⁰ ロシアが黒海から地中海に向かうことへの牽制でもあった。L. Trampe, *Der Kampf um die Dardanellen* (Stuttgart/Berlin, 1915).

⁷¹ Erich Meyer, *Deutschland und Ägypten* (Berlin, 1915).

⁷² Richard Hennig, *Der Kampf um den Suezkanal* (Stuttgart, 1915).

⁷³ Otto Höttsch, *Österreich-Ungarn und der Krieg* (Stuttgart/Berlin, 1915). 協商国側ではこの同盟国のエジプト方面への進出に対して、エジプト支配の強化で臨んだ。W. Ormsby-Gore, “The Future in Egypt”, in: *The New Europe*, 13(1919), 95-100.

⁷⁴ Alfred Hettner, *Die Ziele unserer Weltpolitik* (Stuttgart/Berlin, 1915). また、ハンス・デルブリュックもヨーロッパ構想では不十分として中央アフリカ構想を作成した。Hans Delbrück, *Bismarcks Erbe* (Berlin, 1915).

⁷⁵ Fritz Wertheimer, *Deutschland und Ostasien* (Stuttgart, 1914).

⁷⁶ P. Gast, *Deutschland und Südamerika* (Stuttgart/Berlin, 1915).

⁷⁷ マルタ、ジブラルタルなどのイギリスの地中海の拠点の中立化が目指された。Freiherr von Mackay, “Italien und Mittelmeer, Welt- und Kolonialpolitik”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 167-168.

⁷⁸ G.v. Schulze-Gaevernitz, *Freie Meere!* (Stuttgart/Berlin, 1915).

の調達がドイツ帝国指導部、軍部によって計画された⁷⁹。

この3つの立場は、戦況に応じて使い分けられたが、いずれも最終的に世界強国を目指すものであり、第一次世界大戦後のドイツにとってふさわしい地位を考えていた⁸⁰。協商国に対しては、1918年の休戦に至るまで、この戦争の防衛的性格を主張し、上記のような要求を呑むことが和平の前提条件とされた⁸¹。

第2章 同盟国の占領政策とその転換点

大戦中に占領した地域、もしくは今後占領する予定の地域を含めた、巨大な領域を統治するために、対象とされた土地の気候（居住、農作物生産への適性）、地域住民の数（労働力としての価値）、原料の産出・運搬手段、軍事的拠点としての価値などが同盟国政府によって調査された。また問題とされたのが、占領地の政治体制である。

ドイツ帝国指導部の軍部は、主に直接的併合を目指したが、統治が困難な地域に関しては、経済的な利益などを享受できる傀儡国家を作る方針も進められた。社会主義勢力からの批判を避けるために⁸²、占領される地域の住民の同意のもとに、平和的な介入を行っているようにも見せた⁸³。同盟国にとって自決権の適用は、ドイツの占領地の自治政策と同義とされ、さらに協商国をけん制する道具としても使用されたのであった⁸⁴。

増え続ける占領地域における非ドイツ人⁸⁵の処遇をめぐり、軍事支配、統治する人間の数の問題が生じた⁸⁶。フリードリヒ・ナウマンの提唱する「中欧人」といった、民族を越えた概念は根づかなかった⁸⁷。一方で大戦前からの人種主義的なドイツ人優越主義⁸⁸などは強まり、ドイツ系の人々（フラマン人、東欧にいるヴォルガドイツ人⁸⁹、北米・南米などに住むドイツ系住民⁹⁰）、二重君主国のマジヤール人と連携して、スラブ人を指導する政策

⁷⁹ ドイツの新興工業家である August Thyssen、Hugo Stinnes、Emil Kirdorf、Alfred Hugenberg などは、海外市場の消失への不安から、大陸市場の制覇を目指していた。

⁸⁰ それは大戦前のアフリカ植民地構想を中心とする世界政策の実現でもあった。*Deutsche Weltpolitik und kein Krieg!* (Berlin, 1913)。この世界政策は、外務省、植民地省以外に全ドイツ派、国民自由党、ドイツ西部工業界の指導者などが提唱した。

⁸¹ エルザス＝ロートリンゲン、南ティロール、イストリア、ドイツ植民地、パレスティナ、シリア、アラビアなどの協商国側の占領を批判。

⁸² Anton Fendrich, *Der Krieg und die Sozialdemokratie* (Stuttgart, 1915)。

⁸³ Karl Kumpmann, *Imperialismus und Pazifismus in volkswirtschaftlicher Beleuchtung* (Stuttgart, 1916)。

⁸⁴ 自決権に関しては、アイルランド、エジプト、インド、モロッコの例を持ち出し、イギリス、フランスに牽制をかけた。

⁸⁵ 東欧のスラブ民族、西部戦線における占領下にあるフランス人、ワロン人、資源・食糧を保有するルーマニア人、ウクライナ人、ユダヤ人などが問題となった。

⁸⁶ Ramsay Muir, "Europe and the Non-European World", in: *The New Europe*, 3(1917), 321-328, 360-368, 403-408。

⁸⁷ 板橋拓己『中欧の模索：ドイツ・ナショナリズムの一系譜』（創文社、2010）。

⁸⁸ L. Niessen-Deiters, *Krieg, Auslanddeutschum und Presse* (Stuttgart/Berlin, 1915)。

⁸⁹ バルト海沿岸部へのドイツ系ロシア人の植民計画が練られた。

⁹⁰ Hermann Oncken, *Deutschlands Weltkrieg und die Deutschamerikaner. Ein Grusz des Vaterlandes uber den*

も出てきた。その中でもドイツ政府にとっては、隣接する二重君主国におけるドイツ人との連携が最も必要とされたのだった⁹¹。

中欧構想が普及し、一方でオスマン帝国が大戦中にドイツの経済力、軍事力に対して依存するようになると、ドイツの中東、北アフリカの統治が計画された⁹²。その際にはイスラームも踏まえた宗教政策が求められ⁹³、その管理はボスニア・ヘルツェゴビナのイスラームを支配していた経験を持つオーストリア＝ハンガリーが担うことになっていた。ドイツ帝国とオーストリア＝ハンガリーの同盟において、すでに、プロテスタントとカトリックの宗派の相違が問題となっていたが、バルカン半島からオスマン帝国まで含む領域を統治する際には、正教徒、イスラームも含めた宗教政策が必要となったのであった⁹⁴。

以上のような地域再編の政策は、戦局の変化に応じて、調整を強いられていったが、その中でも以下の3つが転換点となる。

1. 協商国による海上封鎖

まず1915年11月末からのイギリスによる海上封鎖である⁹⁵。同盟国に向けての食料、原料の輸入が途絶え⁹⁶、同盟国内部で協力が必要となり、効率的な食料の再配分が求められた⁹⁷。一方でマジャール人のオーストリアへの食料輸出の制限も始められ、ドイツ人の戦時体制の構築も急務となった。まず独逸合邦を中心とした経済領域を作り上げ、その後、中東まで含めた陸続きの大経済領域の構築が目指された⁹⁸。オスマン帝国まで広がる中欧によって、インドからの人的物的支援を可能にするエンパイアルートの遮断が目指された⁹⁹。これは中欧からアフリカへの連絡を確保する上でも重要であった¹⁰⁰。

Ozean (Stuttgart/Berlin, 1914).

⁹¹ 特にドイツ性 *Deutschtum* の主張をしていたのは、ズデーテンドイツ人のヘルマン・ウルマンなどであった。Hermann Ullmann, *Krieg und Kolonisation. Ideale der deutschen Jugend* (München, 1915).

⁹² Ernst Jäckh, *Die deutsch-türkische Waffenbrüderschaft* (Stuttgart, 1915).

⁹³ G. H. Becker, *Deutschland und der Islam* (Stuttgart/Berlin, 1914). ベッカーはドイツの生存を考えた際に、中東の確保が不可欠であり、その上で円滑な統治を可能にするイスラームの研究を進めることを主張した。

⁹⁴ Carl Anton Schafer, *Deutsch-türkische Freundschaft* (Stuttgart/Berlin, 1914).

⁹⁵ イギリスへの敵対心は、プロイセン的・ドイツ的・ゲルマン的世界観（正義・名誉心・道義）とアングロサクソンの世界観（貨幣に対する偶像崇拜）の対比で示されていた。Hermann Losch, *Englands Schwäche und Deutschlands Stärke* (Stuttgart/Berlin, 1914).

⁹⁶ 白パン用の小麦、粗飼料（大麦）、濃厚飼料、野菜、鶏卵、肉および肉脂肪、コーヒー、ココア、黒パン用のライ麦、ジャガイモなど。Alfredo Hartwig, *Die Bedeutung eines Stickstoffmonopols für Deutschland* (Berlin, 1915). 北米、南米からの輸入が途絶え、農業に不可欠な肥料も不足したため、その経済的重要性をドイツ政府は認識した。Alfredo Hartwig, “Die weltwirtschaftliche Bedeutung des Südamerikamarktes”, in: *Deutsche Rundschau*, 170(1917), 337-349.

⁹⁷ 食糧事情の悪化とともに衛生学の研究も進んだ。Carl von Noorden, *Hygienische Betrachtungen über Volksernährung im Kriege* (Stuttgart/Berlin, 1915).

⁹⁸ Emil Zimmermann, “Die Deckung der Türkei”, in: *Preußische Jahrbücher*, 168(1917), 313-317.

⁹⁹ Max Uebelhör, *Syrien im Krieg* (Stuttgart/Berlin, 1917). またオスマン帝国と中央アフリカからの圧力により、エジプトを独立させる計画もたてられた。

¹⁰⁰ イスラームを大量に擁するアフリカを、宗教政策を使って統治しようとした。Hans Zache, “Islam und Ostafrikanisches Kolonialreich”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 130-131.

2. パリ経済会議

さらに 1916 年 6 月のパリ経済会議である。この会議で、協商国は、上記の同盟国への食料、原料の輸出制限、そしてドイツ製品のボイコットを協議した。それに対して同盟国側では中欧におけるアウタルキー創出の意志が固まる¹⁰¹。総力戦に耐え抜くための健康¹⁰²を踏まえた衛生学、心理戦¹⁰³の準備が整えられ、女性の戦争協力を要請しつつ¹⁰⁴、ドイツ人の精神的な結束も図られた¹⁰⁵。同盟国、協商国の双方の経済圏の構築¹⁰⁶に関して否定的なウィルソンの仲介が 1916 年 12 月 12 日に入った。しかしドイツ政府は、協商国側の経済的な包囲が解かれない以上、対抗できる経済圏が不可欠と考えており、当時すでに同盟国内で広まっていたナウマンの『中欧』もその政策を思想的に後押しすることになった¹⁰⁷。しかしアメリカへの対応の際に、この戦争がドイツにとって防衛戦争であり、中欧もその領域の住民の同意のもとで、成立していることを示す必要に迫られた。

3. ロシア革命

最後に 1917 年のロシア 10 月革命である¹⁰⁸。革命の勃発により、東部戦線における勝利への期待が高まり、同盟国側で戦争目的の練り直しが行われた¹⁰⁹。ドイツは東欧へ支配領域を増やし、大戦前からの在外ドイツ人との政治的連携を強め、ドイツ性 *Deutschtum* の維持を第一次目標とした。オーストリア＝ハンガリーのドイツへの軍事的従属も進み、ドイツ帝国の拡大としての合邦が論じられるようになる。同盟国政府とボリシェヴィキ政府との間で行われたブレスト・リトフスクの交渉の際には、ドイツはそれまでの原料要求¹¹⁰に

¹⁰¹ 協商国のボイコットに対して、同盟国は、アフリカの油ヤシ（パーム油、パーム核油）、コプラ、ピーナツ油を獲得でき、協商国に依存しない経済圏の創出を目指した。協商国側からの同盟国のアウタルキーへの批判的評価に関しては、以下の文献を参照。J. Saxon Mills, “Germany's Project of Empire”, in: *The New Europe*, 2(1917), 58-62.

¹⁰² Gotthard Würfel, *Der Sieg der deutschen Volksgesundheit im Weltkriege* (Stuttgart/Berlin, 1916).

¹⁰³ W. Kapp, *Das innerpolitische Deutschland und der Krieg. Zur Psychologie der gegenwärtigen innerpolitischen Stimmungen und Bewegungen* (Stuttgart/Berlin, 1917).

¹⁰⁴ Gertrud Bäumer, *Der Krieg und die Frau* (Stuttgart/Berlin, 1914).

¹⁰⁵ H. Oswalt, *Wirtschaftliches Durchhalten* (Stuttgart/Berlin, 1916).

¹⁰⁶ Richard Kiliani, *Der deutsch-englische Wirtschaftsgegensatz* (Stuttgart, 1915). 特にイギリスの経済圏に関しては、以下を参照。Franz Stuhlmann, “Englands koloniales Kriegsziel”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 86-91.

¹⁰⁷ Paul Leutwein, *Koloniale Lehren des Weltkrieges* (Berlin, 1916).

¹⁰⁸ Arno J. Mayer, *Political Origins of the New Diplomacy, 1917-1918* (New Haven, 1959). [斉藤孝、木畑洋一訳『ウィルソン対レーニン—新外交の政治的起源、1917-1918 年』岩波書店、1983 年。]

¹⁰⁹ *Die russische Revolution von 1905 als Grundlage zum Verständnis der jetzigen Revolution* (Stuttgart/Berlin, 1917).

¹¹⁰ 同盟国の軍部はゴム、木綿、アスベスト、銅、ニッケル、錫、石油などを要求し、ドイツ工業界は鉾石、マンガン鉾を要求した。ドイツの自由主義政治家グスタフ・シュトレーゼマンの原料の要求は穀物、石油、マンガン、鉾石、木綿に及んだ。Friedrich Oloff, “Die Notwendigkeit eines Großen Afrikanischen Kolonialreichs für Deutschland”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 35(1918), 103-106.

加え、東欧に散在するドイツ系住民の自決権を利用した勢力圏の拡大を要求した¹¹¹。一方でレーニンとウィルソンとの対立が激化し、ヨーロッパの帝国主義国全体は対応を迫られるが、同盟国においては、ポリシェヴィズムに対する防波堤としての意識が醸成されただけだった¹¹²。ブレスト・リトフスク条約もドイツ社会民主党も含めてドイツ議会で承認され¹¹³、これはウィルソンの態度を硬化させ、アメリカが君主主義・軍国主義的ドイツに立ち向かう原因となった。大戦末期となると、最低限の目標として、独逸合邦がドイツ、オーストリアにおいて、再度論じられることになった¹¹⁴。

第3章 地域再編の社会的影響

上記のような地域再編の政策が同盟国によって計画され、占領地での実施が始まると、以下のような社会秩序の変化が生まれた。

1. 経済構造

経済構造に関しては、以下のような変化が現れた。協商国からの海上封鎖、それに伴う貿易制限によって、ドイツ植民地からの連絡が途絶え、貿易量が急激に減少した。それに起因する物資の不足に関して、同盟国内では統制経済が敷かれ、国家による経済、国民生活への支配が強まった。関税同盟による経済圏構築が進み¹¹⁵、また分業体制構築が進んだ。さらには原料産出地域と消費地を結ぶ中央ヨーロッパにおける鉄道網の形成が重視された¹¹⁶。その中で占領下にあるロンウィ・ブリエの鉱山は、戦時中に利用されたが、ウクライナの穀倉¹¹⁷、ルーマニアの油田、カフカスのマンガン、銅、原油などは、その獲得の重要性は宣伝されたが、実際に利用されるには至らなかった。既存の産業構造全体が変化し、食料・原料を生産、産出する地域が重視される中で、資源を持たず、国民経済も消耗して

¹¹¹ すでに大戦初期から行われていた東欧に向けての移住計画も再度進められた。Raimund Friedrich Kaindl, *Deutsche Siedlung im Osten* (Stuttgart, 1914).

¹¹² Otto Jöhlinger, “Sozialdemokratische Kriegsziel=Erörterungen”, in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 120-121.

¹¹³ Hans Delbrück, “Die zweite russische Revolution. Brest=Litowsk”, in: *Preußische Jahrbücher*, 171(1918), 131-142.

¹¹⁴ Otto Bauer, *Die Österreichische Revolution* (Wien, 1923). [酒井晨史訳『オーストリア革命』早稲田大学出版部、1989年。]

¹¹⁵ W. Gerloff, *Der wirtschaftliche Imperialismus und die Frage der Zolleinigung zwischen Deutschland und Österreich-Ungarn* (Stuttgart, 1915).

¹¹⁶ Dirk van Laak, *Imperiale Infrastruktur. Deutsche Planungen für eine Erschließung Afrikas 1880 bis 1960* (Paderborn, 2004).

¹¹⁷ ロシアの農産物の三分の一を生産していただけではなく、鉱物生産の70パーセントをも占めていた。しかもドイツの占領下にあるウクライナとポーランドを相互に対立させ、牽制することも可能であった。またベルリンからバグダードへの連絡の安全も保障されるため、パウル・ロールバハもウクライナ政策に積極的に参加した。Peter Borowsky, *Deutsche Ukrainepolitik 1918. Unter besonderer Berücksichtigung der Wirtschaftsfragen* (Lübeck, 1970).

いたオーストリアの立場が動揺した。ドイツ帝国に対して、オーストリア＝ハンガリー二重君主国、オスマン帝国¹¹⁸が経済的に従属していくと、負債の抵当として、国内資産を要求され、ドイツ経済に組み込まれていく¹¹⁹。経済圏が中東まで到達し、アフリカまで視野に入る中で、オーストリアはドイツの一部となったのであった。

2. 中欧と社会秩序

中欧の政治的統一要求は以下のように変化した。まず大戦中は西部戦線と東部戦線の塹壕が準国境的役割を果たし、同盟国内ではその勢力圏を維持するべく既存の国家の枠組みを超えた中欧が宣伝された。ドイツ帝国では、中欧での統治の協力者を作るべく全ドイツ的な政治活動を行い、ドイツ人の住んでいる地域を取り込む方策がとられた。またドイツ人の植民を進め¹²⁰、もしくは傀儡政権をたて、同盟国の指導を徹底させる政策も採用された。傀儡政権を樹立する際には、自決権の限定的承認、軍事的恫喝を多用することになった。中欧は、ドイツ帝国主義の目的であったため、帰属する対象とはならなかったのである。

二重君主国では、国家の統一は皇帝、軍隊などの政治的要素に頼っていたため、皇帝フランツ・ヨーゼフ 1 世が亡くなり、軍事的、経済的な崩壊が進み、それらの統合要素が失われると、その代替措置として中欧を統合の要素とした¹²¹。しかし中欧がドイツ人の戦争目的となり、スラブ系住民の離反が進み¹²²、深刻な食料供給の危機をうけて、二重君主国を維持するのは困難になった。次第にオーストリアのドイツ系住民は、二重君主国の維持ではなくドイツ帝国との合邦により、世界強国の地位を目指し始める¹²³。

結論

同盟国の東部戦線における戦争目的は、1918 年 3 月 3 日のブレスト・リトフスク条約締結によって達成された。ドイツ帝国指導部、ドイツに対して経済的・軍事的に従属していたオーストリアは、西部戦線における勝利の平和も期待し、植民地を再編したゲルマン

¹¹⁸ Dschawid-Bei, *Türkische Kriegsfinanzwirtschaft. Budgetrede, gehalten in der türkischen Kammer am 3. März 1917* (Stuttgart/Berlin, 1917).

¹¹⁹ オーストリアの狙っていたポーランドも最終的にドイツの経済的支配の下に置かれた。

¹²⁰ ロシア帝国内のドイツ人植民者のポーランドへの移住計画については以下の文献を参照。Immanuel Geiss, *Der polnische Grenzstreifen 1914-1918. Ein Beitrag zur deutschen Kriegszielpolitik im Ersten Weltkrieg* (Lübeck/Hamburg, 1960). ドイツ人による北部東方植民地圏という理念は、ワイマール共和制期に引き継がれた。Raimund Friedrich Kaindl, *Deutsche Siedlung im Osten* (Stuttgart, 1914).

¹²¹ R. W. Seton-Watson, *German, Slav, and Magyar: A Study in the Origins of the Great War* (London, 1916).

¹²² またハンガリー王国におけるマジャール人の人口比も中欧が拡大するにつれ少数派となり、ロシア帝国領などのスラブ系住民の民族運動と接触するにつれ、王国内におけるスラブ人の政治活動も活発化した。

¹²³ 一方で、地中海、北アフリカにおける植民地の拡大は望んでいた。

民族の帝国¹²⁴を実現しようとした。しかし 1918 年 8 月 8 日の決定的軍事的敗北、ブルガリア、オスマン帝国、オーストリア＝ハンガリーの脱落から同盟国の勝利の平和は絶望的となった。同盟国は、占領地域を保持しつつ、その統治を可能にする独逸合邦に、再度注目し、アメリカのウィルソン大統領の十四か条¹²⁵に沿ったアンシュルスを要求した。この要求は協商国側の反対から実現せず、ヨーロッパに散らばるドイツ系住民の統合も実現しなかった。しかし同盟国では中欧構想、中央アフリカ構想の実現が目指され、それに伴い支配民族としてのドイツ人の団結、維持が図られていたため、その分立状態は容認されなかった。大戦を経て、大戦前の国家体制が崩壊した中で、自身の利益を保持するためにドイツ人、ドイツ系の人々の連携の必要性が共有されていたのである。大戦後は国家主導でドイツ人の民族自決、そして植民地返還を求めていく¹²⁶。ナチスドイツのアンシュルスに対する政治的、経済的な青写真は用意されたのだった¹²⁷。

¹²⁴ 中欧にベルギー、ルクセンブルク、ロンウィ・ブリエを結合させ、フランスとオランダを依存させる。東部では、クアレント、リーフラント、エストニア、リトアニア、ポーランド、フィンランド、ウクライナ、クリミア、グルジアを勢力下に置く。東南部は、オーストリア＝ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、オスマン帝国がドイツの経済圏に組み込まれる。海外にはスーダン、スエズを経由して中央アフリカと経済的に連結する予定であった。Emil Zimmermann, “Afrika und die Weltpolitik”, in: *Preußische Jahrbücher*, 171(1918), 414-418.

¹²⁵ 航海の自由、通商制限の撤廃などはイギリス、フランスに不利な提言であった。領土的な条件は、ロシア、ベルギー、フランスからの撤退を意味していたため、ドイツに不利であった。

¹²⁶ 第一次世界大戦から戦間期にわたるヨーロッパと植民地の関係に関しては、以下を参照。Dirk van Laak, *Über alles in der Welt. Deutscher Imperialismus im 19. und 20. Jahrhundert* (München, 2005). 民間の政治団体でも植民地の要求は継続された。Hans Grimm, *Der Schriftsteller und die Zeit* (München, 1931).

¹²⁷ 戦間期にすでに欧州構想と植民地構想は不可欠なものとして要求された。Arthur Dix, *Schluß mit "Europa"! Ein Wegweiser durch Weltgeschichte zu Weltpolitik* (Berlin, 1928). これらの要求と、ナチスの要求との区別は次第に無くなった。Arthur Dix, *Weltkrise und Kolonialpolitik. Die Zukunft zweier Erdteile* (Berlin, 1932).

史料

1. Bauer, Otto, *Die Österreichische Revolution* (Wien, 1923). [酒井晨史訳『オーストリア革命』早稲田大学出版部、1989年。]
2. Bäumer, Gertrud, *Der Krieg und die Frau* (Stuttgart/Berlin, 1914).
3. Becker, Wilhelm Martin, “Die koloniale Alternative”, in: *Grenzboten*, 75(1916), H.33, 193-201.
4. Brandenburg, Erich, *Deutschlands Kriegsziele* (Leipzig, 1917).
5. Brockhausen, Carl, *Oesterreichs Kriegsziel* (Wien, 1915).
6. Chamberlain, Houston Stewart, *Deutschlands Kriegsziel* (Oldenburg, 1916).
7. Charmatz, Richard, *Österreich-Ungarns Erwachen* (Stuttgart/Berlin, 1915).
8. Class, Heinrich, *Zum deutschen Kriegsziel. Ein Flugschrift* (München, 1917).
9. Clifford, Hugh Charles, *German Colonies: A Plea for the Native Races* (London, 1918).
10. Deckert, Emil, *Panlatinismus, Panslawismus und Panteutonismus in ihrer Bedeutung für die politische Weltlage. Ein Beitrag zur europäischen Staatenkunde* (Frankfurt am Main, 1914).
11. *Deutsche Weltpolitik und kein Krieg!* (Berlin, 1913).
12. Delbrück, Hans, *Bismarcks Erbe* (Berlin, 1915).
13. Delbrück, Hans, “Versöhnungs=Friede. Macht=Friede. Deutscher Friede.”, in: *Preußische Jahrbücher*, 168(1917), 485-493.
14. Delbrück, Hans, “Die zweite russische Revolution. Brest=Litowsk”, in: *Preußische Jahrbücher*, 171(1918), 131-142.
15. *Die russische Revolution von 1905 als Grundlage zum Verständnis der jetzigen Revolution* (Stuttgart/Berlin, 1917).
16. Dix, Arthur, *Der Weltwirtschaftskrieg. Seine Waffen und seine Ziele* (Leipzig, 1914).
17. Dix, Arthur, *Schluß mit "Europa"! Ein Wegweiser durch Weltgeschichte zu Weltpolitik* (Berlin, 1928).
18. Dix, Arthur, *Weltkrise und Kolonialpolitik. Die Zukunft zweier Erdteile* (Berlin, 1932).
19. Dschawid-Bei, *Türkische Kriegsfinanzwirtschaft. Budgetrede, gehalten in der türkischen Kammer am 3. März 1917* (Stuttgart/Berlin, 1917).
20. Fabri, Friedrich, *Bedarf Deutschland der Colonien?* (Gotha, 1879).
21. Gast, Paul, *Deutschland und Südamerika* (Stuttgart/Berlin, 1915).
22. Gerloff, W., *Der wirtschaftliche Imperialismus und die Frage der Zolleinigung zwischen Deutschland und Österreich-Ungarn* (Stuttgart, 1915).
23. Grimm, Hans, *Der Schriftsteller und die Zeit* (München, 1931).
24. Hartwig, Alfredo, *Die Bedeutung eines Stickstoffmonopols für Deutschland* (Berlin, 1915).

25. Hartwig, Alfredo, "Die weltwirtschaftliche Bedeutung des Südamerikamarktes", in: *Deutsche Rundschau*, 170(1917), 337-349.
26. Hashagen, J., "Kolonialverluste und Kriegsziele", in: *Grenzboten*, 76(1916), H.51, 324-327.
27. Hettner, Alfred, *Die Ziele unserer Weltpolitik* (Stuttgart/Berlin, 1915).
28. Hiltebrandt, Philipp, "Propaganda und Kriegsziele", in: *Deutsche Rundschau*, 176(1918), 136-149.
29. Hoffmann, Karl, *Das Ende des Kolonialpolitischen Zeitalters. Grundzüge eines Wirtschaftsorganischen Genossenschafts=Imperialismus* (Leipzig, 1917).
30. Jentsch, Carl, "Wo liegt unser Kolonialland?", in: *Grenzboten*, 75(1916), H.38, 375-378.
31. Jöhlinger, Otto, "Koloniale Kriegs- und Friedensziele", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 91-92.
32. Jöhlinger, Otto, "Sozialdemokratische Kriegsziel=Erörterungen", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 120-121.
33. Kaff, Sigmund, "Zur Frage eines deutsch-österreichisch-ungarischen Zollverbandes", in: *Die Neue Zeit*, 33(1915), 657-662.
34. Kaindl, Raimund Friedrich, *Deutsche Siedlung im Osten* (Stuttgart, 1914).
35. Kapp, W., *Das innerpolitische Deutschland und der Krieg. Zur Psychologie der gegenwärtigen innerpolitischen Stimmungen und Bewegungen* (Stuttgart/Berlin, 1917).
36. Karstedt, Oskar, "Grundsätzliches zur Kolonialfrage", in: *Grenzboten*, 75(1916), H.43, 97-102.
37. Karstedt, Oskar, "An der Schwelle einer neudeutschen Kolonialpolitik", in: *Grenzboten*, 76(1917), H.50, 281-289.
38. Karstedt, Oskar, *Deutschlands koloniale Not* (Berlin, 1917).
39. Karstedt, Oskar, *Koloniale Friedensziele* (Weimar, 1917).
40. Kautsky, Karl, *Die Vereinigten Staaten Mitteleuropas* (Stuttgart, 1916).
41. Kautsky, Karl, *Habsburgs Glück und Ende* (Berlin, 1918).
42. Kiliani, Richard, *Der deutsch-englische Wirtschaftsgegensatz* (Stuttgart, 1915).
43. "Koloniale Wünsche und Probleme", in: *Die Neue Zeit*, 33(1915), 827-831.
44. Leutwein, Paul, *Koloniale Lehren des Weltkrieges* (Berlin, 1916).
45. Leutwein, Paul, *Mitteleuropa-Mittelfrika* (Dresden, 1917).
46. Lewicky, Eugen, *Die Ukraine der Lebensnerv Rußlands* (Stuttgart/Berlin, 1915).
47. Lewin, Evans, *The Germans and Africa: Their Aims on the Dark Continent and how they acquired their African Colonies* (London, 1915).
48. List, Heinrich Theodor, *Deutschland und Mittel-Europa. Grundzüge und Lehren unserer Politik seit der Errichtung des Deutschen Reiches* (Berlin, 1916).
49. Losch, Hermann, *Englands Schwäche und Deutschlands Stärke* (Stuttgart/Berlin, 1914).

50. Mackay, Freiherrn von, *Der Vierbund und das neue europäisch-orientalische Weltbild* (Stuttgart/Berlin, 1916).
51. Mackay, Freiherr von, "Deutsch-Mittelafrika?", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 131-133.
52. Mackay, Freiherr von, "Italien und Mittelmeer, Welt- und Kolonialpolitik", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 167-168.
53. Mackay, Freiherr von, "Der Staat, National= und Weltwirtschaft", in: *Deutsche Rundschau*, 174(1918), 6-30.
54. Mackay, Freiherr von, "Litauisch-Brest und die Aufgaben der modernen Staatskunst", in: *Deutsche Rundschau*, 175(1918), 1-14.
55. Mallmann, Gaston von, *Englands Schuld am Weltkrieg* (Berlin, 1915).
56. Mandl, Leopold, *Die Habsburger und die serbische Frage. Geschichte des staatlichen gegensatzes Serbiens zu Österreich-Ungarn* (Wien, 1918).
57. Marquardsen, Hugo, "Zentralafrika und Mittelafrika", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 5-6.
58. Meister, Al., *Unser belgisches Kriegsziel* (Münster, 1917).
59. Meyer, Erich, *Deutschland und Ägypten* (Berlin, 1915).
60. Mills, J. Saxon, "Germany's Project of Empire", in: *The New Europe*, 2(1917), 58-62.
61. "Mittelafrika: a German War-Aim", in: *The New Europe*, 4(1917), 122-123.
62. Muir, Ramsay, "Europe and the Non-European World", in: *The New Europe*, 3(1917), 321-328, 360-368, 403-408.
63. Naumann, Friedrich, *Mitteleuropa* (Berlin, 1915).
64. Naumann, Friedrich, *Bulgarien und Mitteleuropa* (Berlin, 1916).
65. Noorden, Carl von, *Hygienische Betrachtungen über Volksernährung im Kriege* (Stuttgart/Berlin, 1915).
66. Noske, Gustav, "Die deutsche Sozialdemokratie und die Kolonialpolitik", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 100-102.
67. Noske, Gustav, "Kolonialpolitik nach dem Kriege", in: *Die Neue Zeit*, 36(1918), 481-488.
68. Oberwinder, Heinrich, *England der Urheber der Weltkrise* (Dresden, 1914).
69. Oloff, Friedrich, "Die Notwendigkeit eines Großen Afrikanischen Kolonialreichs für Deutschland", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 35(1918), 103-106.
70. Oncken, Hermann, *Das alte und das neue Mitteleuropa. historisch-politische Betrachtungen über deutsche Bündnispolitik im Zeitalter Bismarcks und im Zeitalter des Weltkrieges* (Gotha, 1917) .
71. Ormsby-Gore, W., "The Future in Egypt", in: *The New Europe*, 13(1919), 95-100.
72. Oswalt, H., *Wirtschaftliches Durchhalten* (Stuttgart/Berlin, 1916).

73. Pályi, Eduard, *Deutschland und Ungarn* (Leipzig, 1915).
74. Pályi, Eduard, *Das mitteleuropäische Weltreichbündnis. Gesehen von einem Nicht-Deutschen* (München, 1916).
75. "Realpolitik im Mittelmeer", in: *Grenzboten*, 73(1914), 64-69.
76. Renner, Karl, *Marxismus, Krieg und Internationale. Kritische Studien über offene Probleme des wissenschaftlichen und des praktischen Sozialismus in und nach dem Weltkrieg* (Stuttgart, 1917).
77. Rohrbach, Paul, *Der deutsche Gedanke in der Welt* (Königstein im Taunus, 1912).
78. Rohrbach, Paul, *Warum es der Deutsche Krieg ist!* (Stuttgart/Berlin, 1914).
79. Rohrbach, Paul, *Unser Kriegsziel im Osten und die russische Revolution* (Weimar, 1917).
80. Schroeder, Viktor Albert, "Bedarf Deutschland einer Vergrößerung seines kolonialen Besitzstandes?", in: *Grenzboten*, 58(1899), H.8, 401-411.
81. Sering, Max, *Westrussland in seiner Bedeutung für die Entwicklung Mitteleuropas* (Leipzig, 1917).
82. Seton-Watson, R. W., *German, Slav, and Magyar: A Study in the Origins of the Great War* (London, 1916).
83. Singelmann, A. D., "Mittelfrika Deutsch", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 26-27.
84. Solf, Wilhelm Heinrich, *Rede zur Gründung der Deutschen Gesellschaft 1914* (Berlin, 1915).
85. Solf, Wilhelm Heinrich, *Die Lehren des Weltkriegs für unsere Kolonialpolitik. Ein Vortrag* (Stuttgart, 1916).
86. Stern, Jacques, *"Mitteleuropa". Von Leibniz bis Naumann über List und Frantz, Planck und Lagarde* (Stuttgart, 1917).
87. Stuhlmann, Franz, "Englands koloniales Kriegsziel", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 86-91.
88. Tirpitz, Alfred von, *Der Aufbau der deutschen Weltmacht* (Stuttgart, 1924).
89. Trietsch, Davis, *Palästina und die Juden. Tatsachen und Ziffern* (Berlin, 1919).
90. Uebelhör, Max, *Syrien im Krieg* (Stuttgart/Berlin, 1917).
91. Waltemath, Kuno, "Vergeßt die Kolonien nicht!", in: *Preußische Jahrbücher*, 163(1916), 26-48.
92. Weyhmann, Horst, "Die Arbeiterschaft und die Kolonien", in: *Die Neue Zeit*, 36(1918), 174-180.
93. Wiedenfeld, Kurt, *Der Sinn Deutschen Kolonialbesitzes* (Bonn, 1915).
94. Wiese, Josef, *Belgisch=Kongo* (Berlin, 1916).
95. Winterstetten, K. von, *Berlin-Bagdad. Neue Ziele mitteleuropäischer Politik* (München, 1914).
96. Wirth, Albrecht, Emil Zimmermann, *Was muß Deutschland an Kolonien haben?* (Frankfurt, 1918).

97. Würfel, Gotthard, *Der Sieg der deutschen Volksgesundheit im Weltkriege* (Stuttgart/Berlin, 1916).
98. Wütschke, Johannes, "Deutschland und England in Afrika", in: *Grenzboten*, 76(1917), H.1, 296-307., 333-345.
99. Zache, Hans, "Islam und Ostafrikanisches Kolonialreich", in: *Deutsche Kolonialzeitung*, 34(1917), 130-131.
100. Zimmermann, Emil, *Was ist uns Zentralafrika? Wirtschafts- und verkehrspolitische Untersuchungen* (Berlin, 1914).
101. Zimmermann, Emil, "Die politische und militärische Bedeutung Zentralafrikas", in: *Preußische Jahrbücher*, 165(1916), 327-332.
102. Zimmermann, Emil, "Bedingte und unbedingte Kolonialpolitik", in: *Preußische Jahrbücher*, 165(1916), 508-515.
103. Zimmermann, Emil, *Das deutsche Kaiserreich Mittelfrika. Als Grundlage einer neuen deutschen Weltpolitik* (Berlin, 1917).
104. Zimmermann, Emil, "Die Deckung der Türkei", in: *Preußische Jahrbücher*, 168(1917), 313-317.
105. Zimmermann, Emil, "Die Frage nach dem Kriegsziel", in: *Preußische Jahrbücher*, 169(1917), 132-140.
106. Zimmermann, Emil, "Sir Harry Johnston als kolonialpolitischer Charlatan", in: *Preußische Jahrbücher*, 169(1917), 450-455.
107. Zimmermann, Emil, *Die Bedeutung Afrikas für die Deutsche Weltpolitik* (Berlin, 1917).
108. Zimmermann, Emil, "Afrika und die Weltpolitik", in: *Preußische Jahrbücher*, 171(1918), 414-418.
109. Zimmermann, Emil, *Mittelfrika als deutsche Kolonie* (Frankfurt, 1918).

二次文献

110. Baier, Roland, *Der deutsche Osten als soziale Frage. Eine Studie zur preussischen und deutschen Siedlungs- und Polenpolitik in den Ostprovinzen während des Kaiserreichs und der Weimarer Republik* (Köln/Wien, 1980).
111. Baumgart, Winfried, *Deutsche Ostpolitik, 1918. Von Brest-Litowsk bis zum Ende des Ersten Weltkrieges* (Wien, 1966).
112. Baumgart, Winfried, *Deutschland im Zeitalter des Imperialismus (1890-1914). Grundkräfte, Thesen und Strukturen* (Frankfurt am Main, 1972).
113. Baumgart, Winfried, *Der Imperialismus. Idee und Wirklichkeit der englischen und französischen Kolonialexpansion, 1880-1914* (Wiesbaden, 1975).

114. Borowsky, Peter, *Deutsche Ukrainepolitik 1918. Unter besonderer Berücksichtigung der Wirtschaftsfragen* (Lübeck, 1970).
115. Braunthal, Julius, *Otto Bauer. Eine Auswahl aus seinem Lebenswerk* (Wien, 1961).
116. Calder, Kenneth J., *Britain and the origins of the new Europe, 1914-1918* (Cambridge/New York, 1976).
117. Cann, John P., "Angola and the Great War", in: *Small Wars & Insurgencies*, 12(2001), 144-165.
118. Cann, John P., "Mozambique, German East Africa and the Great War", in: *Small Wars & Insurgencies*, 12(2001), 114-143.
119. Connaughton, Richard, "The First World War in Africa (1914-18)", in: *Small Wars & Insurgencies*, 12(2001), 110-113.
120. Conze, Werner, *Polnische Nation und deutsche Politik im Ersten Weltkrieg* (Köln, 1958).
121. Crozier, Andrew J., *Appeasement and Germany's Last Bid for Colonies* (Basingstoke, 1988).
122. Fischer, Fritz, *Griff nach der Weltmacht. Die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland, 1914-18* (Düsseldorf, 1961). [村瀬興雄監訳『世界強国への道 I ドイツの挑戦、1914-1918 年』岩波書店、1972 年、同監訳『世界強国への道 II ドイツの挑戦、1914-1918 年』岩波書店、1983 年。]
123. Gatzke, Hans Wilhelm, *Germany's Drive to the West (Drang nach Westen). A Study of Germany's Western War Aims during the First World War* (Baltimore, 1950).
124. Geiss, Imanuel, *Der polnische Grenzstreifen 1914-1918. Ein Beitrag zur deutschen Kriegszielpolitik im Ersten Weltkrieg* (Lübeck/Hamburg, 1960).
125. Gründer, Horst, *Geschichte der deutschen Kolonien*, 5. Auflage (Paderborn/München/Wien/Zürich, 2004).
126. Heater, Derek Benjamin, *National Self-determination: Woodrow Wilson and his Legacy* (Basingstoke/New York, 1994).
127. Helfferich, Karl, *Kriegsfinanzen* (Stuttgart/Berlin, 1915).
128. Hildebrand, Klaus, *Vom Reich zum Weltreich. Hitler, NSDAP und koloniale Frage 1919-1945* (München, 1969).
129. Kießling, Friedrich, *Gegen den "großen Krieg"? Entspannung in den Internationalen Beziehungen 1911-1914* (München, 2002).
130. Kruck, Alfred, *Geschichte des Alldeutschen Verbandes, 1890-1939* (Wiesbaden, 1954).
131. Laak, Dirk van, *Imperiale Infrastruktur. Deutsche Planungen für eine Erschließung Afrikas 1880 bis 1960* (Paderborn, 2004).
132. Laak, Dirk van, *Über alles in der Welt. Deutscher Imperialismus im 19. und 20. Jahrhundert* (München, 2005).
133. Louis, William Roger, "Some British Reactions to German Colonial Methods, 1885-1907", in:

Historical Journal, 17(1974), 165-175.

134. Mayer, Arno J., *Political Origins of the New Diplomacy, 1917-1918* (New Haven, 1959). [齊藤孝、木畑洋一訳『ウィルソン対レーニン—新外交の政治的起源、1917-1918年』岩波書店、1983年。]
135. Meyer, Henry Cord, *Mitteleuropa in German Thought and Action, 1815-1945* (The Hague, 1955).
136. Mommsen, Wolfgang, “Die Mitteleuropaidee und die Mitteleuropaplanungen im Deutschen Reich vor und während des Ersten Weltkrieges”, in: Richard G. Plaschka/Horst Haselsteiner/ Arnold Suppan/Anna M Drabek/Birgitta Zaar (Hg.), *Mitteleuropa-Konzeptionen in der Ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts* (Wien, 1995), 3-24.
137. Neitzel, Sönke, „Mittelafrika“ Zum Stellenwert eines Schlagwortes in der deutschen Weltpolitik des Hochimperialismus, Wolfgang Elz, Sönke Neitzel (Hg.), *Internationale Beziehungen im 19. und 20. Jahrhundert. Festschrift für Winfried Baumgart zum 65. Geburtstag* (Paderborn, 2003), 83-103.
138. Neitzel, Sönke, *Weltmacht oder Untergang. Die Weltreichslehre im Zeitalter des Imperialismus* (Paderborn, 2000).
139. Peter, Wolfgang, “Der Kampf um die Deutschen Kolonien”, in: Wolfgang Michalka (Hg.), *Der Erste Weltkrieg. Wirkung, Wahrnehmung, Analyse* (München, 1994), 392-411.
140. Schausberger, Norbert, *Der Griff nach Österreich. Der Anschluss* (Wien/München, 1978).
141. Schöllgen, Gregor, *Imperialismus und Gleichgewicht. Deutschland, England und die Orientalische Frage 1871-1914* (München, 1984).
142. Smith, Woodruff D., *The German Colonial Empire* (Chapel Hill, 1978).
143. Smith, Woodruff D., *The Ideological Origins of Nazi Imperialism* (New York/Oxford, 1986).
144. Stoecker, Helmuth (Hg.), *Drang nach Afrika. Die koloniale Expansionspolitik und Herrschaft des deutschen Imperialismus in Afrika von den Anfängen bis zum Ende des zweiten Weltkrieges* (Berlin, 1977).
145. Tschapek, Rolf Peter, *Bausteine eines zukünftigen deutschen Mittelafrika. Deutscher Imperialismus und die portugiesischen Kolonien. Deutsches Interesse an den südafrikanischen Kolonien Portugals vom ausgehenden 19. Jahrhundert bis zum ersten Weltkrieg* (Stuttgart, 2000).
146. Wedi-Pascha, Beatrix, *Die deutsche Mittelafrika-Politik, 1871-1914* (Pfaffenweiler, 1992).

邦語文献

147. 赤松儀彦、岡部広治、野沢豊、倉持俊一、松俊夫、荒井信一『帝国主義（世界史講座

- V)』(東洋経済新報社、1954).
148. 板橋拓己「『中欧』の理念とドイツ・ナショナリズム (1)—フリードリヒ・ナウマン『中欧論』の研究—」『北大法学論集』55 巻 6 号 (2005), 429-474.
149. 板橋拓己「『中欧』の理念とドイツ・ナショナリズム (2・完)—フリードリヒ・ナウマン『中欧論』の研究—」『北大法学論集』56 巻 1 号 (2005), 468-514.
150. 板橋拓己『中欧の模索: ドイツ・ナショナリズムの一系譜』(創文社、2010).
151. 小沢弘明「民族自治・民族自決・合邦—ドイツオーストリア社会民主党の転換」『現代史研究』33 号 (1987), 12-31.
152. 杵淵文夫「第一次世界大戦前後の F.ナウマンの中欧思想—歴史意識と民族問題」『文化』70 巻 3・4 号 (2007), 333-316.
153. 熊谷一男『ドイツ帝国主義論』(未来社、1973 年).
154. 河野裕康「ヒルファディングと中欧構想」『社会思想史研究』11 号 (1987), 177-193.
155. 小西厚子「第一次世界大戦と『全ドイツ協会』」『帝京法学』3 巻 2 号 (1971), 61-83.
156. 小西厚子「第一次世界大戦へのドイツの国民的結集の背景について」『帝京法学』4 巻 1 号 (1971), 61-74.
157. 杉原達『オリエントへの道: ドイツ帝国主義の社会史』(藤原書店、1990).
158. 藤瀬浩司「ドイツ中欧経済協会の設立」『経済科学』36 巻 4 号 (1989), 31-56.
159. 藤瀬浩司「ユリウス・ヴォルフと中欧経済協会 1904-1918」『経済科学』44 巻 3 号 (1996), 1-20.
160. 守屋治善「第一次世界大戦前のドイツにおける『中欧』構想」『地域文化研究』3 号 (1998), 75-83.
161. 歴史学研究会編『強者の論理: 帝国主義の時代』(東京大学出版会、1995 年).